



IAEA 便り 5年目の原子力施設安全部での生活(その1)

オフィスの環境と仕事

IAEA シニア - エンジニアリング
セフティオフィサー

齊藤 健彦

Email: t.saito@iaea.org

B棟8階

窓ガラスの向こうの外は風もかなり強くふいているようでとても寒そうだ。夜も更けて周りには人っ子一人いない。ウィーンを中心からやや北に位置する IAEA ビル B 棟 8 階の個室オフィスで 1 人パソコンに向かっていている。このオフィスには、鍵のかかる戸のついた大型書庫とオープン本棚が合計 8 つと、ピンポン台以上の大きさのあるデスクと椅子、小さな会議用テーブルと椅子のセット、個人用プリンタつきコンピュータセットと、コート・帽子ハンガースタンドが備えられてある。IAEA のプロフェッショナル(国際職員)はランクにより広さは違うが、原則として全員個室のオフィスが与えられる。

4 年前に東芝から IAEA にやってきて、このオフィスに案内されてきた時には、書類は一切なく、ガラランとしていたが、今は書庫の上を含めて多くの書類ファイルであふれている。これらの資料は大部分、小生がこの部屋で作成したり、作業に用いたものであるが、よくもこのように多くの書類がたまったものだ。

IAEA 生活 5 年目に入ったこの機会に、IAEA 便りとして、このオフィスより、こちらの生活をご報告する。

社長 秘書 世界のエキスパート(各自が社長)

オフィスが個室であるのに加えて、わが施設安全部では、プロフェッショナルがほとんど独立して個別に働くので、まるでつぶれる心配のない中小企業の社長(兼小使い)のようだ。世の常で、働く“社長”のところには仕事が集まるが、ここでは仕事をしなくてもほとんど問題にならないらしい。この“社長”をあらゆる面で助けるのが秘書であり、よい秘書を持つことが極めて重要である(通常、3 名のプロフェッショナルにつき 1 人の秘書がつく)。

シルビア(オーストリア)、エリザベス(ウクライナ)、ダグマー(オーストリア)、ソニア(英国)、パーン(シリア)、アンドリア(オーストリア)、マレーン(パレスチナ)が、この 4 年間で小生の秘書を勤めてくれた。さすがにこんなに頻りに秘書が変わるのは珍しいが、まわりをみてもかなりの頻度で秘書が変わっている。小生と一緒に働いた秘書は、1 人を除いて皆よく仕事ができる優秀な女性ばかりであった。優秀な秘書ほど良いポストを目指して動いていってしまう傾向があり、その点が痛し痒しといったところだ。

“社長”にとってもうひとつ重要なことは、いかにうまく外部の優秀なエキスパートと一緒に働けるかということである。このため、広いネットワークを持ち、担当するプロジェクト、タスクごとに、短時間で優秀な世界のエキスパートを集めることが、IAEA でよい仕事をする上で極めて重要なのである。

いやが上でも広がる視野

わが施設安全部の現在の部長ケン(米国原子力規制委員会)出身の朗らかな米国人で、性格がとても穏やかなため人望が厚い。エンジニアリングセクション(課に相当)のヘッドは、もと大学教授のトルコ人アイバースで、彼の下で、イタリア人のマルコとパウロ、アルゼンチン人のアントニオ、ハンガリア人のシーラ、チェコ人のラディーム、東京電力より出向中の日本人でタックこと稲垣氏と小生の計 8 名のプロフェッショナルが、原子力発電所の設計およびエンジニアリング分野の安全に関する仕事を担当している。

現在、IAEA にはローテーションポリシーというのがあって、プロフェッショナルは通常、初めに 3 年の契約で働き出し、その後、最大 2 回までの各 2 年間の契約更新しか認められず、合計 7 年間で転出しなければならない。これと定年(現在 62 歳)のためしょっちゅう人が変わっていく。ちょっと前まではフランス人のピエールがデザインユニット(班)ヘッドでいた(最近組織のフラット化により、ユニット廃止)、上記のように秘書も同僚も変わる上、世界各国の外部エキスパートと一緒に働くので、異文化に対するハードルは低くなり、いやが上でも視野が広がっていくのが実感される。日本の常識は世界の常識ではないことを日々体験する。

IAEA 施設安全部に来てちょっと面白く感じたものに、不定期ではあるが通常 4 時から始まるオフィスフロアでの和気あいあいとしたパーティがある。我らのオフィスフロアである 8 階のエレベーターホール前や、オフィスを挟む廊下で、歓送迎パーティや誕生パーティがあり、シャンパンやワインを飲みながら懇親を深めている。その一例として、小生の秘書だったダグマーの廊下送別パーティの様子を添付の写真に示す。写真の中央のスプリンクラの下あたりに写っている東洋人が小生である。両端に個室オフィスの入り口が見えている。

日本の貢献

わが施設安全部には世界各国から職員が来ているが、なんといても 50 を超える運転中の原子力発電所を有し、現在も原子力発電所を建設中なのはわが国のみである。まわりの同僚をみても、実際の原子力発電所の設計、許認可、建設に従事したことのあるプロフェッショナルは、日本人を除きほとんどいないというのが現状である。その点が考慮されてか、日本人“社長”にとっては、やりがいのある面白い仕事がいくらでも入ってくる。小生が経験したいいくつかの実例を以下に紹介するが、施設安全部にかかわらず、IAEA はまさに日本人が世界に貢献できる格好の仕事場といえる。



ダグマー送別廊下パーティー

ウィーンでの仕事と出張業務

周囲環境の説明はこのくらいにして、続いて勤務先の施設安全部での仕事内容を紹介したい。当部では、発電用および研究用の原子力施設の安全に関する各種プログラムを担当しており、主要なプログラムとしては、立地・設計・建設・運転の各段階でより高いレベルの安全を確保・維持するための安全基準シリーズとこれらをサポートする各種技術図書の作成(ウィーンでの仕事)と、メンバー国の要請に基づき、原子力施設および安全規制当局の活動に対して、これらの書類に照らした国際的なピア(仲間同士)レビューを行い、助言を与える安全サービス(出張業務)がある。

IAEA 安全基準とコンサルタントミーティング

最近、IAEA 安全基準の全面改訂作業がほぼ終了し、現在、次の改訂(5年サイクル)の準備にとりかかっている。設計に関する安全基準(安全リクアイアメントおよび安全ガイド)は現在13ある。このほかに、運転段階のエンジニアリングに関するガイドを、小生を含む上記計8名のプロフェッショナルで分担している。小生はこのうち3つの設計ガイドの改訂と1つの運転ガイドを現在担当している。

通常、IAEA 安全基準の新規作成や改訂版作成にあたっては、各分野の世界のエキスパートを3名程度コンサルタントとして雇ってのコンサルタントサービスミーティングを数回実施し、IAEA 原子炉安全基準委員会、IAEA メンバー国、IAEA 安全基準コミッション、IAEA パブリケーション委員会のレビューを受けた後、正式発行される。委員会メンバーやメンバー国エキスパートのレビューコメントすべてに対しても、このコンサルタントサービスミーティング等を経て IAEA 見解を整理した資料を作成する。そのなかでも、“原子力発電所非常用電源の設計”に関するガイドは、小生が IAEA に勤務してすぐに改訂担当を命じられたもので、3年半かかって昨年9月に改訂版が発行された、個人的にも思い出深い資料である。この安全ガイドの改訂にあたっては、合

計21カ国のエキスパートがレビューした379のコメントおよび提案結果が考慮された。この点で IAEA の安全ガイドは真に世界の英知の結集の産物といえる。

その他の IAEA 安全資料と技術会議

IAEA 施設安全部では、安全レポートシリーズや TECDOC シリーズといった世界の原子炉安全情報をまとめた技術資料も発行している。これらの図書を発行するに当たっては通常、エキスパートによる技術会議を開催し、その会議で発表・議論された資料を用いたり、ワークショップを開催しそれらの資料をまとめて最新安全情報を発表している。

昨年(2004年)12月13~15日にわたって、IAEA 安全基準の次の改定に資するため、世界で建設を目指して開発されている改良発展タイプの原子炉のライセンスと、実際の開発に携わっている合計15名の専門家を IAEA 本部に集めて、次期改良発展型原子炉発電所の安全要求と安全技術に関する情報交換技術会議を開催した。次期原子炉の実現に取り組んでいる会議参加者(世界のエキスパート)から、IAEA 安全基準の今後改訂に関する貴重なご意見もいただき、この会議をベースに IAEA・TECDOC 資料を近々発行する予定である。

ホイリゲ

施設安全部では、上記コンサルタントミーティングや技術会議の例の様に各種の国際会議を頻繁に開催している。これらの会議期間中一度は、親睦を深めるための懇親会を開催するようにしている。ウィーンにはホイリゲと呼ばれる地ワインと郷土料理を食べさせる当地独特な飲み屋が多くあり、したがってホイリゲで懇親会をすることが多い。これらの飲み会を通して、自然に世界の原子力関係者と仲良くなれるのが、IAEA 勤務のメリットのひとつだ。また、IAEA で働く日本人の間にもホイリゲ会という飲み会があり、情報交換を理由によく集まって、いろいろな経歴をもつ邦人原子力関係者と懇親を深めている。

ゴルフ、オペラ、旅行

ウィーンでは仕事外に楽しめることが極めて多い。冬のスキー、春から秋にかけてのゴルフ(近い、安い、綺麗!)、オペラをはじめとする音楽鑑賞、美術館・博物館、オーストリア国内および近隣ヨーロッパ諸国への手軽な旅行等、日本にいてはなかなかできないがこちらでは手軽にできることが山ほどある。

日本式残業

ここまで書いてパソコンの向こうの窓の外を見てみた。ウィーンの西の小高い丘のタワーの明かりがボツンとみえる。夜もだいぶん更けてきたようだ。“社長”もそろそろ帰宅しなければならない。でも、IAEA から車で15分以内にアパートへ着けるので気が軽い。(続く……)

(2005年 2月2日記)